



35カ所目の国立公園として6月、日高山脈襟裳十勝国立公園が誕生しました。北海道中央南部で南北約140キロに連なる日高山脈は、美しい景観や希少な植物が多くの登山者に人気ですが、実は日本にある岩や石の7割を観察できるといわれ、「岩石の宝庫」でもあります。こども記者まなつの2人が8月、日高管内日高町でその楽しみ方を探りました。

「岩石の宝庫」歩いて実感

「岩石の宝庫」歩いて実感

2人は藤田みささん（苫小牧市・ウツナイ小6年）と江谷心結さん（日高管内平取町・平取小5年）。日高町内の日高山脈博物館を訪ね、岩石や地質を研究している学芸員の東豊土さん（45）に案内してもらいました。東さんは日高山脈について「1300万年前にプレートとプレートがぶ

ふしぎ！ 地下の石が山に

つかり、ぶつかった方の上半分がめくれ上がって山になった、世界的にもめずらしい場所と教えてくれました。プレートとは卵のからのように地球の表面をおおひ、ほんの少しずつ動いている岩盤のこと。世界で最も標高が高い地域のヒマラヤ山脈も、プレート同士のしゅうとつでできました。

日高山脈の場合、ぶつかった方のプレートはそのまま山になり、ぶつかった方はしよげきにより海底や地下深くの物質が地表まで上がってき、いろいろな種類の岩石が分布しました。藤田さんは「地下深くでできた石が山で見つかるなんて不思議」と話しました。

また日高町は昔は海でした。だから日高町では（約1億4500万年前）6600万年前の、白亜紀に海底で生きていたアンモナイトの化石も見つかるし、地下30キロにあるかんらん

岩も出てくるんです」と東さんは言います。

なぞの8400万年

博物館に近い北日高岳（751メートル）のふもとには、ユニークな地層が見られる場所があるといいます。地層とは海底の砂やどろが何万年もかけて積み重なったもので、どの時代のものか分かりません。

「岩石ハンター」気分

日高山脈を形づくるさまざまな岩石が集まっているのが沙流川。2人は東さんから石を割るハンマーを借り、河原を散策しました。

「これは何の石ですか？」「このキラキラしているのは？」。石を割っては質問する2人に、東さんはルーペで断面を観察しながら「これはペンケヌーシ岳に多いはんれい岩。これはかくせん岩で幌尻岳周辺の岩石」と答えてくれました。宝石のサファイアをふくむ石も時々見つかるそうです。

藤田さんも江谷さんも、すっかり岩石ハンターに。江谷さんは「石について、もっと調べたいと思った」と興味深そうでした。



「なみだの滝」の近くで、東豊土さん（右）といっしょに岩石を観察する江谷心結さん（中央）と藤田みささん（左）

（魚眼レンズ使用、いずれも井上浩明さん提供）



博物館で日高山脈の岩石の展示を見る江谷さん（右）と藤田さん



沙流川の河原で石の断面を観察する藤田さん



河原で気になった石を東さん（右）に見せる江谷さん



日高山脈をつくった二つのプレートは今もおし続ける力が働き、年間数ミリの高くなっています。江谷さんは「東さんの話を聞き、日高山脈のおもしろさが分かりました」。藤田さんは「日高山脈について学べる博物館へ、みんなも行ってみてほしい」と呼びかけます。計り知れない時間と地球の力でつくられた日高山脈が国立公園として大事にされる理由を、2人は感じとっていました。